



**Osaka University
Forum on China**

Discussion
Papers
in
Contemporary
China
Studies

No.2009-8

中国の自画像と日本の中国像

——歴史的変遷の画期を求めて——

堤 一 昭

中国の自画像と日本の中国像*

歴史的変遷の画期を求めて

2009年12月20日

堤 一 昭†

* 本稿は2009年8月に大阪で開催された第三回「現代“中国”の社会変容と東アジアの新環境」国際シンポジウムでの提出論文を改訂したものである。

† 大阪大学大学院文学研究科准教授(共生文明論講座)。

〒560-8532 豊中市待兼山町 1-5 大阪大学大学院文学研究科
tsumkazu@let.osaka-u.ac.jp

はじめに

21世紀初頭の現在，日本で中国と言えば中華人民共和国の領域という地理的な枠組でイメージし，その枠組をはるか過去にまで遡らせて中国の歴史をも考えがちである。だが，この中国像や認識も様々な変遷の一結果に過ぎない。現代中国地域研究においても，自他の中国像の変遷を長い時間の中でたどり，将来の変容の可能性まで考えることは，注意を払うべき課題である。

この問題意識のもとで著してきた諸論文¹に基づき，本論文は「国民国家」形成以前の近代に重点を置き，中国と日本での中国“像”、空間・時間の両側面からの中国をどう認識したかを歴史的に検討する。結果をあらかじめまとめておく次のようになる。

中日の中国像は，ともに儒教的な「中国 - 四夷」の図式と，「正史」と「正統」の継承によって規定されてきた。現代にいたるまで，中日の「中国²」像は三回にわたり同じ時期に，内容は異なるが大きく変化してきた。それらの画期は中日を取り巻く環境が世界史的規模で変化した時期であることが注目される。

第一の画期は，13～14世紀のモンゴル帝国・元朝の時代である。中国の巨大化と「正統」の多元化という現象が起こった。モンゴル帝国の日本侵攻によって，日本では仏教的世界観と神国思想とによって中国の地位を相対化しようとする思想が生まれた。

第二の画期は，17世紀の明朝から清朝への交代期である。清朝の拡大によって，中国の巨大化と「正統」の多元化が再現された。「四夷」の一つから出た清朝が中国を支配したことは，日本の中国像に大きな動揺をもたらした。伝統中国への憧れと現実の中国への蔑視というアンビバレンスの源となった。

第三の画期は，19世紀に「西洋の衝撃」を受けて中日が「国民国家」を形成していく時期である。中国では，巨大化した中国と多元化した「正統」の状態からどう「国民国家」としての中国を形成するかの模索が始まる。日本では，西洋からの文明史観という新たな図式の導入によって，文明への到達を中日が同列に競うライバルであるとする思想が現れ，現在にまで大きな影響を与えた。

．「中国」像の歴史的構造

中国・日本双方の「中国」像を規定し続けてきたものの一つは，「中国 - 四夷」の図式である。儒教におけるいわゆる中華思想，華夷の思想に基づき世界を認識するこの図式は次のように形成された[吉本 2007]。戦国時代中期の『春秋左氏伝』に，華夷思想に基づき「中国」と「四夷」とを対置する言説が現れ，後期には両者を包摂する「天下」の概念や，「中国」による「四夷」の同化の論理も現れる。秦始皇，前漢武帝の時代の拡大期を経て同化が限界に達し，華夷関係の基本的な枠組みが完成した。

儒教的な「中国 - 四夷」の図式にくわえて中国・日本の「中国」像を規定してきた歴史的構造

¹ [堤 2007 ; 2008a ; 2008b ; 2008c ; 2009]。本論文は主に[堤 2009]に基づくが，字数の関係上，中国の自画像を検討した前半の内容は簡潔に要点のみを示す。

² 検討の対象とする歴史的な中国と現在の中華人民共和国との混同を避けるため，歴史的な中国は，括弧付きで「中国」と表記する。

は、紀元前 1 世紀の『史記』を最初とする、「正史」と「正統」の考えとその継承である³。司馬遷は、太古の「五帝」時代から現在に至るまで「中国 - 四夷」図式が存在しつづけ、「中国」にはその時々唯一の帝王が存在するという歴史像を描いた。「中国 - 四夷」図式が現れはじめるのは戦国時代中期であり、殷・周に先立つ時期には、その図式に対応する歴史状況もない。彼は自身が生きた前漢の武帝時代の華夷関係の基本的な枠組みを溯って叙述の始点「五帝」時代に至るまで投影したと考えられる。この歴史像、「中国」像は、それが将来へも続いていくと読者に示唆した。『史記』の後も、それを継承した紀伝体の歴史書が中華民国初期に至るまで編纂され、その「中国」像も継承されていった。

・「中国」像の巨大化と「正統」の多元化

1) 蒙古帝国・元朝の衝撃

儒教的な「中国 - 四夷」図式、および『史記』に始まる「正史」と「正統」の継承により描かれた「中国」像は、そのまま現在の中国には直結せず、大きな変化が間に存在する。それは 13～14 世紀のモンゴル帝国・元朝によってもたらされた「中国」像の巨大化と「正統」の多元化という現象である[堤 2008a : 175-189]。この現象は 17～18 世紀に満洲族による清朝によって再現されて現在の中国へつながる。

「中国」の巨大化、「正統」の多元化とは何か。「中国」の巨大化は、「中国」を支配する政権の全体の領域が巨大化したこと、つまり政権にとって「中国」が支配領域の一部となったことにより起こった。その政権は、「正統」の「皇帝」として「中国」を支配するほか、それ以外の地域・集団に対しては別の「正統」をもって臨むことになる。それが「正統」の多元化である。

1206 年のチンギス・カンの即位に始まるモンゴル帝国五代目のクビライ・カアン（元世祖）が南宋を滅ぼした結果、彼は北亜、西藏、雲南等の地域に「中国」全土をくわえて、“直接”の支配領域とした。「四夷」の一つ「北狄」のモンゴルにより「中国」全土が併呑されるという想定外の事態に対し、士大夫はこの元朝の君主を「中国」の「正統」の「皇帝」と見なし、また政権も「中国」統治には伝統的な「中国」の統治システムをも採用した。「中国」像を規定してきた図式は維持されたのである。さらに「中国」の「皇帝」でもある君主が支配するゆえに、以前からの「中国」以外の領域も、「中国」であるとの含意が士大夫の間で生まれた。理念上のことながら「中国」像は巨大化したのである。

一方、クビライ・カアン以後の元朝の君主は、「中国」の「正統」の「皇帝」として以外に、モンゴルの君主としての「正統」、仏教思想に基づく「正統」の三つの「正統」を有していた⁴。元朝の君主は、モンゴル帝国のモンゴル貴族層に対しては、他のモンゴルの君主（カン）より一段高い権威を持ち、チンギス・カン以来の血統を受けつぐモンゴル帝国全体の大カアンとしての地位を保った。またクビライの信任を得た「帝師」パспаによって、仏教的な「正統」化が行われた。その結果、元朝の君主はチベットやその他の各地の仏教徒には、正義を以て世界全て（四大

³ 『史記』が「中国」像に与えた影響の大きさについては、岡田英弘が 1991 年以来各種論著で主張する[堤 2007 : 31-36]。

⁴ 儒教的な「中国」像以外でも、政権の支配・統治が正しいこと、正当であることの主張は、過去の理想化された支配・統治のあり方を正しく引きついでいること（「正統」）によってなされたため、それらをも含めて「正統」の多元化ととらえることができる。

洲)を治める最高の理想的な君主「金転輪聖王」として臨んでいた。多元化した「正統」の、地域や人間集団ごとの使い分けと言えよう。

2) 清朝による巨大化・多元化の再現

明朝では華夷概念が復活して、北アジアのモンゴルは「夷狄」であって「中国」には含まれないという考えが主流となる。一方で元朝の時代に統合された南方の雲南・貴州を支配しつづけ、「中国」の巨大化を部分的に引き継いだ。

「中国」の巨大化、「正統」の多元化が再現されるのは、清朝の二代目の太宗ホンタイジと六代目の高宗乾隆帝の時代に起こった二つの変化を経てからのことである⁵。太宗は、1635年、元朝の後裔のチャハル王家のエジェイから「中国」の「正統」の「皇帝」が受けつぐとされた玉印「伝国之璽」を譲り受け、翌年に満洲族・モンゴル族諸王、漢族武将らによる推戴を受けて「皇帝」に即位し、国名を「大清」と改めた。これは、彼が満洲の君主だけでなく、元朝の三つの「正統」のうち二つ、モンゴルの正統と「中国」の正統とを継承するとのアピールであった。明朝の滅亡を機に「中国」を支配する以前から清朝は元朝を受けつぎ、「正統」を多元化していたことになる。

乾隆帝は18世紀後半、准噶爾を滅し、その南の「回部」も併合してそれらを「新疆」(新たな領域の意)とし、チベットへの監督権を強化した。清朝は蒙古帝国全体には及ばないが、元朝の領域を再現したことになる。また乾隆帝とチベットとの関係は、施主と仏教教団との関係に喩えられ、また彼の存在は仏教の文殊菩薩の化身(文殊の化身の一つが金転輪聖王)とされた。元朝のクビライとチベットとの関係が再現され、チベット仏教を信仰するチベットと蒙古へは、この「正統」をもって臨んだ。なお、「新疆」のイスラーム教徒は異教徒である清朝君主の支配を「正統」とはし難かった。ただ、その支配が公正なためにそれに対しては「塩の義務」なる服従義務を果たすべきだとの考えが生まれた。

3) 現代における歴史的「中国」の残像

以上に述べてきた前近代の「中国」像は、現在ではもう“残像”のようにしか現れない。「中国 - 四夷」図式のような見方は、すでに一般的な自文化中心主義との区別がつけられない。現在進められている2002年から2013年の10年計画の国家プロジェクト『清史』編纂では、通記・典誌・伝記・史表・図録という構成がとられるという⁶。まさに『史記』の「本紀(紀)」「書(志)」「列伝(伝)」「年表」を想起させる。「正史」が前提とした「中国」像と現実とはすでに異なり、民国初期に紀伝体の『清史稿』も編纂されている。先立つ政権の「正史」を編纂させることは、政権が自らを「正統」であるとの伝統的な政治的アピールであったことを、このプロジェクトから思い出す人もいるだろう。

現在の中国の領域が清朝の領域の大部分を受けつぐことは明らかである。中国で出版された『中国歴史地図集』は原始社会から清朝までの歴史地理を記す。そこで原始社会から“中国”として扱われている地理的範囲は、現在の中国ではなく清朝の乾隆帝時代の最大領域である。ここに元朝の時に始まり清朝で再現された巨大化した「中国」の“残像”を見ることはできないだろうか[吉開

⁵ この変化に関する最新の論著は、[宮脇 2009][杉山 2009]参照。

⁶ 「『清史』編纂プロジェクト、総体的な枠組みと目録が原則的に確定」(「チャイナネット」2004/05/21, 『人民網』日本語版 http://j1.people.com.cn/2004/05/21/jp20040521_39625.html (2009年7月26日))

2003]。

多民族国家たる現在の中国には、費孝通の「中華民族多元一体格局」理論があり、中国の通史を、「中華民族」の形成過程としてとらえようとする[西澤 2008：13-64]。その「多元」という名称ではあるが、多元化よりも一体化にむかう歴史の流れに、より注意が向けられているといえるだろう。

・日本の「中国」像——周辺からのアンビバレンス

1) 『神皇正統記』の「中国」像

儒教的な「中国—四夷」図式は、圧倒的な大国であった「中国」から儒教の書物とともに日本に“輸入”され、受容されたと考えられる。それ以後、日本はこの図式に基づいて自らをとりまく世界、国際情勢を理解してきた。だが、自らは「中国」の周辺の「四夷」の一つ「東夷」として劣った存在となってしまうため、「中国」文化への憧れとともに、古くからこの図式に対抗しようとする意識がはたらいていた。7世紀初頭、「倭（日本という国号が現れるのは8世紀初頭）」の王からの使者が隋の煬帝へ差し出した国書の冒頭が、「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや。」（『隋書』倭国伝）と、対等を強く主張したものであったことは有名である。

日本の中国像の画期は、中国と同じく元朝の時期、鎌倉・南北朝時代にある。この時期に生まれた「中国」像は、14世紀前半、南朝方の公家・北畠親房が著した歴史書『神皇正統記』の序文に鮮やかに記されている[岩佐 1965：44-45]。その部分を現代語訳で示す。〔（）内は言葉の説明，〔〕は言葉を補った部分，…は省略した部分を示す。下線は注目すべき箇所である。以下同じ〕

そもそも内典（仏教の経典）によれば、「宇宙の中心に須弥山」という山がある。この山をめぐる七つの金山がある。……金山の外には四大海があり。この海中には四つの大州（大陸）がある。〔そのうち〕南の大州を瞻部州（人間の世界）という。……南の瞻部州の中心には阿耨達という山がある。……阿耨達山の南は大雪山（ヒマラヤ山脈）、北は葱嶺（パミール高原）である。葱嶺の北は胡国、雪山の南は五天竺（インド。中と東西南北の五つに分かれるので五天竺）、その東北は震旦国（「中国」）、西北は波斯国（ペルシア）である。この瞻部州は、縦横（南北）が七千由旬、里〔の単位〕で数えると二十八万里。東海から西海に至るまでが九万里、南海から北海に至るまでも九万里〔の距離である。その中で〕天竺（インド）は真ん中にある。だから〔天竺を〕瞻部州の中国（ここでは真ん中の国という、字義通りの意味）とするのである。〔天竺の〕地の周囲は九万里もある。震旦国（「中国」）が広いとはいっても、五天竺（インド）と比べてみれば、片隅の小国なのである。

日本は彼の陸地（瞻部州）を離れて海中にある。北嶺の伝教大師・南都の護命僧正は、〔日本のことを〕中州（この語に北畠親房は真ん中の陸地という字義通りの意味をも込めていると考えられる）であると書き記されている。それならば、〔日本は、四つの大州（大陸）のうち〕南州と東州との間にある遮摩羅という州（陸地）にあたるであろうか。『華嚴經』に「東北の海中に山があり、金剛山という」とあるのは、大和（奈良県）の金剛山のことだということ。となると、この国（日本）は天竺（インド）よりも震旦（「中国」）よりも東北の大海の中にあるということになる。〔日本は、瞻部州とは〕別の陸地であって神明（天照大神）の皇統（みかどの血統）を伝えられている国なのである。

『神皇正統記』は神話の時代から南朝の天皇に至る「正統」の歴史を儒教的な価値観も交えて記すが、この部分からは「中国—四夷」図式とは別個の世界観を導入して「中国」に対する日本の相対的地位を上昇させようとする意図が読みとれる。彼は、仏教的な世界観に基いて世界の中心はインドであり、「中国」は片隅の国だとして、「中国」の位置を低下させる。日本が片隅にあることは認めざるを得ないが、神国思想に基づいて日本を特別の国であると位置づけている。

こうした「中国」像成立には、元朝との二度の戦争、蒙古襲来（「元寇」は江戸時代以後の造語）がもたらした衝撃を無視できない。未曾有の国難に神仏の助けによって敵を撃退したとの意識、日本の仏教界における「中国」への対等意識が背景にあると考えられる⁷。引用部分と相応するような世界地図「五天竺図」（1364年書写。法隆寺蔵）も現存する[応地 1996][ジャメンツ 2007]。また、強大な他者・外敵に対して、“小さいが特別な神国である日本”という図式の成立も読みとれ、この図式は後世にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。欧米艦隊来航からの江戸時代末期、太平洋戦争期の対外意識などにその例が認められる。

2) 『華夷変態』の「中国」像

次に日本の「中国」像変化の画期となったのは、17世紀半ばの明から清への交代期、江戸時代の初期である。呉三桂らの清朝への反乱「三藩の乱」が1673年に始まり、台湾に抛り明朝復興を目指す鄭成功も呼応して、清朝による「中国」支配もどうなるか危ぶまれた。幕府も「中国」情勢の変化に神経を尖らせ、長崎に来航する中国商人からの情報（唐船風説書）を集めていた。

幕府の儒学・外交等のプレーンであった林鷺峯は、1674年に唐船風説書をひとまず集成して『華夷変態』と名づけた（この書名でさらに集成が続けられる）⁸。彼による序文を現代語訳で示す。

崇禎帝（明の最後の皇帝）が天に昇り、弘光帝（福王）もえびす（清朝）の手に落ち、唐王・魯王がわずかに南の片隅を保つだけだ。一方、韃靼（清朝）は中原（「中国」）にのさばっている。このことは中華に夷狄が取って代わるという形勢である。……朱氏（明の帝室）が帝位を失ったのはわが国の正保年間に当たる。それ以来三十年あまり、福州・漳州（いずれも福建省）の商船が長崎にやってきて言い伝えたこと（唐船風説書）で、江戸にまで伝わったものがある。その中でお上の耳に入れることがらは、それを読みあげ、[また漢文は]読み下してさしあげる。わが一族（林家）はつねにこれに関わってきた。その（唐船風説書）草案は手元にとどめて反故の山になっている。これが無くなることをおそれたがために、その（唐船風説書）事情を述べ、書き写して書物となして『華夷変態』と名づける。

近ごろ聞くとところによれば、呉[三桂]や鄭[経]が[「中国」の]各省に檄文を送って[中華]回復の企てをしているという。その勝敗は分からないが、もしも夷狄に中華が取って代わる情勢になるなら、たとえ方域（国）を別にしている、なんと快いことではないか。

林鷺峯は「中国 - 四夷」の図式によって、国際情勢を理解しようとしている。書名の『華夷変態（中華が四夷に形態を変える）』もその考えを示したものである。つまり「中国」（＝中華）の明朝に代わって、「四夷」の一つ「北狄」たる清朝が「中国」を支配することを、あるべきでない状況としてとらえている。逆に明朝への強いシンパシーもうかがえ、明朝から清朝への交代が与

⁷ 蒙古襲来が日本の自画像に与えた衝撃については[黒田 2003]参照。

⁸ [榎 1981：1]この書の性格については、同書の浦廉一の解説による。

えた衝撃が読みとれる。成書時期はやや遅れるが、鄭成功をモデルとした主人公が明朝復興のために韃靼国（清朝）と戦う、近松門左衛門の浄瑠璃『国性爺合戦』（1715年）にも同様の意識が読みとれる。

伝統「中国」文化への憧れとともに、「北狄」の清朝が支配する現実の「中国」への蔑視という正負二つの感情が交じったアンビバレンスがここに生まれた⁹。また、この時期に神国思想に基づき、日本こそ真ん中の国“中国”であると主張する山鹿素行の『中朝事実』（1669年）が著された[田原 1971：17-18][廣瀬 1940-42：21-22]のも、「北狄」たる清朝のあるべからざる「中国」支配が背景として考えられよう。

3) 『文明論之概略』の「中国」像

最後に挙げる日本の「中国」像変化の画期は、19世紀のいわゆる「西洋の衝撃」の時期である。西欧からの文明史観という新たな図式の導入によって、従来の「中国」像が大きく転換した。それをこの時期の代表的な思想家たる福沢諭吉の代表作『文明論之概略』（1875年）、第二章の「西洋の文明を目的とする事」の一節から読みとりたい[福沢 2002：21-22]。()内は原注である。

今世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国並に亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と為し、土耳其、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開の国と称し、阿非利加及び澳太利亞等を目して野蛮の国と云ひ、此名称を以て世界の通論となし、西洋諸国の人民独り自から文明を誇るのみならず、彼の半開野蛮の人民も、自から此名称の誣ひざるに服し、自から半開野蛮の名に安んじて、敢て自国の有様を誇り西洋諸国の右に出ると思ふ者なし。啻にこれを思はざるのみならず、稍や事物の理を知る者は、其理を知ること愈深きに從ひ、愈自国の有様を明にし、愈これを明にするに從ひ、愈西洋諸国の及ぶ可からざるを悟り、これを患ひ、これを悲み、或は彼に学てこれに倣はんとし、或は自から勉てこれに対立せんとし、亜細亜諸国に於て識者終身の憂は唯此一事に在るが如し。(頑陋なる支那人も近来は伝習生徒を西洋に遣りたり。其憂国の情以て見る可し。) 然は則ち彼の文明半開野蛮の名称は、世界の通論にして世界人民の許す所なり。其これを許す所以は何ぞや。明に其事実ありて欺く可らざるの確証を見ればなり。左に其趣を示さん。即是れ人類の当に経過す可き階級なり。或は之を文明の齡と云ふも可なり。

儒教的な「中国—四夷」図式とは別個の世界観・価値観・歴史観を導入して、「中国」に対する日本の相対的地位を上昇させようとする意図が読みとれる。『神皇正統記』と同じ方法である。「世界の通論」であり、「人類の当に経過す可き」である「文明」「半開」「野蛮」の諸段階という新たな歴史観に基づけば、「支那」¹⁰、「日本」とも「半開」段階である。それまで圧倒的な大国であった「中国」が日本と同じ段階とされ、ともに「文明」に至ることを競う立場となったのである。『史記』以来の「正史」では、太古から現在そして将来へも「中国—四夷」図式は“不変”だったが、ここでは“変化”、進歩が前提となる。「中国」像に止まらず歴史観・価値観の一大転換であり、新

⁹ 日本が中国に抱いたアンビバレンスの源はより遡りうる[礪波 2005]が、憧れと蔑視の各対象が顕在化したのはこの時期が初めてである。

¹⁰ 近代以降の日本の「中国」像を考える際に鍵となる「支那」という呼称についての最新の研究は[斎藤 2005]第2章「支那」再論」参照。

しさ・進歩を良しとする現在の我々もこの転換後の歴史観・価値観の中に生きているのである。

この記述の背景には当時の洋務運動がある。福沢はそれを日本の文明開化の強力なライバルと考えたのであろう。引用部分に続けて「支那と日本との文明異同」として両国の政治体制の優劣を長々と論じている[福沢 2002 : 33-38]。ところが、日清戦争後の『福翁自伝』(1897年)では「シナの文明望むべからず」[福沢 1978 : 262-263]と日本の優位を確信し清朝を蔑視した発言に変化している。国民国家の説明の後の、清朝の「中国」支配を「中華の国体」を失ったものと記している部分などからは、伝統「中国」文化への憧れと「北狄」の清朝が支配する現実の「中国」への蔑視という正負の感情が交じったアンビバレンスが読みとれる[福沢 2002 : 40-41]。

以上述べてきた過去の日本の「中国」像は、現在の日本の中国像にも残像のように残る¹¹。例えば、福沢以来の価値観によって日本を「先進」国、中華人民共和国を「途上」国として位置づけようとして、利便性や自由という尺度を用いて相手の「遅れ」を確認しようとする傾向が報道などで感じられる。その一方で、中華人民共和国の近年の急速な発展に対する中国脅威論からは、より古くからの、強大な他者と小さな日本という図式も見える。

・近代以降の「中国」自画像の変化 近年の研究動向

19世紀の「西洋の衝撃」から「国民国家 nation state」を形成していく時期は、「中国」の自画像の大きな画期であることは間違いない。ここで注意すべきは、「国民/民族 the nation」の問題である。これまでの空間・時間的な認識の問題に加えて人間的認識、即ち「誰が「中国」人か？」という問題がより大きくなる。さらに、その「中国」人の言語、「国語 national language」をどう考えるかも問題となった。

これらの問題については、中国内外で膨大な数の研究があり概観すら難しい。そこで四つのポイントに絞り日本で近年発表された研究を紹介し、研究動向を示したい。

1) 「中国」の「国民国家」形成過程

茂木敏夫は、1870-1880年代以降に清朝が周辺地域への支配のあり方を変更し、周辺地域を排他的に近代的な国家秩序に取り込んでいった論理とその実態を検討する[茂木 1993 : 269-299 ; 茂木 1995 : 251-265]。西村成雄はこの問題を専著で最も総合的に論ずる[西村 2004]。20世紀の「中華民族的ナショナリズム」が凝集してどのような段階を経て「国民国家」を形成するかを論じ、さらに20世紀前半と後半とで日本の「中国」像が国民国家形成不可能論から強固な社会主義的国民国家へと転換したことをも指摘する。王柯も20世紀初頭からの国民/民族国家建設の動きと「民族」との関係を検証する[王 2006]。「国語」形成の問題を論じた研究は数多いが、藤井久美子は、孫文の「国語」統一と国家統一の関係についての思想に言及する[藤井 2003]。田中比呂志は清末民国初期に編纂された自国史の教科書の変化を追う[田中比呂志 : 42-57]。

2) 「中国」空間の構造と中華人民共和国の関係

田中仁は現代の「中国」空間の構造を中華人民共和国の領域と漢民族の生活空間という2つの

¹¹ 日本の「中国」像は西村成雄の述べるように20世紀前半と後半とで変化がある(後述)。だが福沢が示した価値観も現代まで続いたことについては、近代以降の日本のアジア観や対外観を論じた子安[2003][尹 1995][芝原 1988]参照。

中心を有する二重の円として整理する[田中仁 2003 : 1-11]。妹尾達彦は中華人民共和国とそれが由来する清朝の統治空間が内中国と外中国に二分され、それらが 3～13 世紀から歴史的に構成された過程を分析する[妹尾 1999 : 3-82]。

3) 「中国」像の理論形成 顧頡剛と費孝通

島田美和は抗日戦争期に顧頡剛ら禹貢派知識人が、孫文の「五族協和」の種族主義的民族論を否定し、「抗日」という感情によって一体化された新しい民族概念を提唱して非漢族地域を中国の「疆域」内に包摂しうる理論を形成したことを論ずる[島田 2008 : 157-174]。西澤治彦らは費孝通の『中華民族多元一体格局』を広く紹介し、理論形成の背景となる考古学会の動向、形成とその評価、今後の問題点を論ずる[西澤 2008 : 13-64]。毛里和子は実際の政策の中での費孝通の役割についても論ずる[毛里 1998]。岩崎菜子は、民族学者としての費孝通の軌跡と顧頡剛との接点等を検討する[岩崎 2008]。

4) 「中華民族」と歴史上の「中国」との関係

費孝通らのいう「中華民族」を歴史的に遡り検討する試みがなされる。王柯は古代に「中国」が国家として誕生して以来、一貫して多民族国家であるとする。「中原」に入ってきた「四夷」により作り上げられた「中華文化」は最初から多民族的な性格を持ち、「文化」によって非「中華」から「中華」に変身する論理を持つとする[王 2005 : 序論]。王柯に対して、濱田正美は歴史における内部の自己認識と外部の観察者の検証との関係という、より根本的な問題意識から再検討する[濱田 2006 : 12-21]。

むすび

「中国」像変遷の跡をふり返ると、まず過去のある時期の現実を解釈して、世界観にもとづいた地域認識の図式による“像”が作られた。その“像”は現実そのものと言うより、“あるべき”または“ありたい”姿でもあった。一度“像”が作られると、時代を経て現実が大きく変化しても過去の“像”の持つ力は強く、人々の地域認識を規定し続けてきた。現在においても前近代の「中国」“像”を検討する価値はここにある。

文献

岩佐正ほか校注(1965)『神皇正統記 増鏡』東京：岩波書店

岩崎菜子(2008)「中央民族学院の建校目的と謝冰心夫妻・費孝通の任務(上)(下)」『中国研究月報』No.725 pp.13-26 ; No.726 pp.61-74

尹健次(1995)「戦後歴史学のアジア観」『岩波講座日本通史別巻 1 歴史意識の現在』東京：岩波書店 pp.249-280

榎一雄編(1981)『華夷変態』東洋文庫叢刊 15 上、東京：東方書店

王柯(2005)『多民族国家 中国』東京：岩波書店

——(2006)『20 世紀中国の国家建設と「民族」』東京：東京大学出版会

応地利明(1996)『絵地図の世界像』東京：岩波書店

岡田英弘(2009)「世界史の中の大清帝国」岡田編『清朝とは何か 別冊環 16』東京：藤原書店 pp.59-73

- 黒田日出男 (2003) 『龍の棲む日本』 東京：岩波書店
- 子安宣邦 (2003) 『「アジア」はどう語られてきたか』 東京：藤原書店
- 齋藤希史 (2005) 『漢文脈の近代』 名古屋：名古屋大学出版会
- 芝原拓自 (1988) 「対外観とナショナリズム」 『日本近代思想大系 12 対外観』 東京：岩波書店 pp.458-534
- 杉山清彦 (2009) 「マンジュ国から大清帝国へ」 岡田英弘編 『清朝とは何か 別冊環 16』 東京：藤原書店 pp.74-91
- 妹尾達彦 (1999) 「中華の分裂と再生」 『岩波講座世界歴史 9』 東京：岩波書店 pp.3-82
- 島田美和 (2008) 「顧頡剛の「疆域」概念」 西村成雄・田中仁編 『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』 東京：汲古書院 pp.157-174
- ジャメンツ・マイケル (2007) 「法隆寺所蔵「五天竺図」についての覚え書き」 藤井譲治ほか編 『大地の肖像 絵図・地図が語る世界』 京都：京都大学学術出版会 pp.84-102
- 田中仁編著 (2003) 『原典で読む 20 世紀中国政治史』 東京：白帝社
- 田中比呂志 (2005) 「創られる伝統 - 清末民初の国民形成と教科書」 『歴史評論』 No.659 pp.42-57
- 田原嗣郎 (1971) 「山鹿素行と土道」 『日本の名著 12』 東京：中央公論社
- 堤一昭 (2007) 「「中国」の自画像 - その時間と空間を規定するもの」 西村成雄・田中仁編 『現代中国地域研究の新たな視圏』 京都：世界思想社 pp.30-61
- (2008a) 「蒙元時代における「中国」の拡大と正統性の多元化」 西村成雄・田中仁編 『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』 東京：汲古書院 pp.175-189
- (2008b) 「「中国」統治における国家の正統性と言語 - 蒙元時代の言語・文化政策研究の現状から」 『第二屆現代中国社会変動と東亜新格局国際学術討論会会議手冊&論文集』 花蓮：東華大学他 pp.54-57;203-212
- (2008c) 「中国の自画像と日本の中国像」 秋田茂・桃木至朗編 『歴史学のフロンティア - 地域から問い直す国民国家史観』 吹田：大阪大学出版会 pp.35-58
- (2009) 「中国の自画像と日本の中国像 - 歴史的変遷の画期を求めて」 田中仁・宮原暁編 『現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境 - 第三回国際シンポジウム論文集』 豊中：大阪大学中国文化フォーラム他 pp.31-39
- 礪波護 (2005) 「日本にとって中国とは何か」 『中国の歴史 12 日本にとって中国とは何か』 東京：講談社
- 西澤治彦ほか訳 (2008) 『中華民族の多元一体構造』 東京：風響社
- 西村成雄 (2004) 『20 世紀中国の政治空間 - 「中華民族的国民国家」の凝集力』 東京：青木書店
- 濱田正美 (2006) 「湖南・樸学・「内」と「外」」 『史林』 第 89 巻第 1 号 pp.1-21
- 廣瀬豊編 (1940-1942) 『山鹿素行全集 思想篇 第 13 巻』 東京：岩波書店
- 福沢諭吉 (1978) 『福翁自伝』 東京：岩波書店
- 福沢諭吉著、戸沢行夫編 (2002) 『福沢諭吉著作集第 4 巻 文明論之概略』 東京：慶應義塾大学出版会
- 藤井 (宮西) 久美子 (2003) 『近現代中国における言語政策』 東京：三元社
- 毛里和子 (1998) 『周縁からの中国 - 民族問題と国家』 東京：東京大学出版会
- 宮脇淳子 (2009) 「大清帝国にいたる中国史概説」 岡田英弘編 『清朝とは何か 別冊環 16』 東京：

藤原書店 pp.42-58

茂木敏夫(1993)「中華世界の「近代」的変容 - 清末の辺境支配」溝口雄三他編『アジアから考える
2 地域システム』東京：東京大学出版会 pp.269-299

——(1995)「清末における「中国」の創出と日本」『中国 - 社会と文化』第10号 pp.251-265

吉開将人(2003)「『中国歴史地図集』の論理 - 歴史地理と疆域観」『史朋』36号 pp.32-48

吉本道雅(2007)「中国古代における華夷思想の成立」夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』
京都：京都大学学術出版会 pp.4-30

中国的自我观与日本的中国观：
追寻历史变迁中的转折期

堤 一 昭

Between China's Self-Images and Japan's Images of China:
A Historical Review

TSUTSUMI Kazuaki

时至 21 世纪初的今日，日本言及中国之时，往往难免有如下思考方式：先勾勒出中华人民共和国地理领域上的轮廓，再以此为基础追溯往昔，考察中国历史。但是，在此思考方式下形成的今日中国观及认识也不过是众变迁带来的结果之一。即便在现代中国地区研究领域，我们仍应考虑到中国的自我观与他国的中国观在穿越历史长河后，将来可能会发生变化。这是一个应引起重视的课题。

本文主要从历史学的角度，对“国民国家”形成前的前现代时期的中国的自我形象及日本人心目中的中国形象进行探讨。中国的自我形象及日本人心目中的中国形象究竟怎样，何时以及发生了怎样的变化，对近现代的中国观又带了何种影响。

中国的自我形象与日本人心目中的中国形象都是被儒教的“中国—四夷”模式以及“正史”、“正统”观念所规定的。这些都是在过去的某时期，人们解释了当时实际情况，而形成了某种世界观。他们根据这种世界观得出地域认识的模式而形成某种形象。其反映出的与其说是现实本身，不如说是其“应有的”或者“理想的”姿态。“形象”一旦形成，纵使时代变迁，现实巨变，其影响力依旧强大，并制约人们对该地域的理解。我们现今对前现代时期中国形象进行探讨的价值即在于此。

反思中日两国的中国观变迁历程时，值得关注的是，两国都有三段对中国观发生了巨大转变的转折期。

第一段转折期是 13~14 世纪的蒙古帝国—元朝时代。其间发生了诸如中国巨大化和“正统”多元化等巨大变化。蒙古帝国侵袭日本、佛教的世界观及神国思想催生了以《神皇正统记》为代表的将中国地位相对化的思想。

第二段转折期是 17 世纪明朝到清朝之间的过渡期。由于清朝疆土的扩大，中国巨大化及“正统”多元化现象再度出现。“四夷”之一的清朝统治了中国，对日本的中国观带来了巨大动摇，也是日本既对传统的中国怀有憧憬的同时又对现实的中国充满蔑视这种双重价值观产生的来源。

第三段转折期是 19 世纪中日两国在遭受“西洋冲击”后，其“国民国家”逐渐形成的时期。身陷巨大化并且多元“正统”状态的中国开始了如何形成“国民国家”的摸索。而在日本，由于西洋文明史观这种新模式的导入，福泽谕吉的思想也随之出现。他认为在摸索达到文明的路径时，中日两国会成为势均力敌的竞争对手。（金晶 译）

担当委员（田中仁）

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/box2/discussionpaper.htm>